

# シンポジウム「水の都市再生・リバーフロントからの挑戦」開催報告



研究第三部 主任研究員 高橋 達也

## 1. はじめに

かつて河川が縦横に流れ、「水の都」と呼ばれた東京（江戸）は、舟運が都市の産業を支え、河畔は交流の場となっていました。しかし、1960年代以降の高度経済成長における都市開発やモータリゼーションの発展により、水運の衰退、河川の排水路化による水質悪化などが原因で人々が水辺に背を向けるようになった。今日、都市の河川は貴重な都市空間として脚光を浴びている。また、河川を都市再生の起爆剤として、リバーフロントからの都市づくりを進めることが求められています。

本シンポジウムは、都市づくりにおける川の再生事例紹介などを通じ、都市の開発・再生を進める企業や、都市づくりや川づくりに関心を持ち活動する市民とともに、今後の都市再生を考えるために開催されました。

当日は関係者を含め、約400名が参加しました。

## 2. 開催概要

○平成16年11月24日（水）

○場所：東京国際フォーラム ホールB7

○第1部 基調講演「水辺を生かした都市再生：21世紀初頭のチャレンジ」：慶應義塾大学・石川幹子教授

○第2部 パネルディスカッション「美しい水辺を取り戻そう！」～水の都・東京の再生をめざして～  
コーディネーターには齋藤宏保氏（ジャーナリスト）、パネリストには、基調講演をして頂いた慶應義塾大学・石川幹子教授や財団法人リバーフロント整備センター前理事長・松田芳夫氏ほか、ディベロッパー各社代表など、各界から参加していただきました。

○主催：シンポジウム「水の都再生・リバーフロントから挑戦」実行委員会（東京都・財団法人東京都公園協会・財団法人リバーフロント整備センター・三井不動産株式会社・三菱地所株式会社・森ビル株式会社の6体で構成）

## 3. 基調講演

基調講演は、慶應大学・石川幹子教授から「水辺を生かした都市再生：21世紀初頭のチャレンジ」と題して、米国ボストンの高速道路（セントラル・アーテリー）地下化、韓国ソウルの高速道路を撤去し

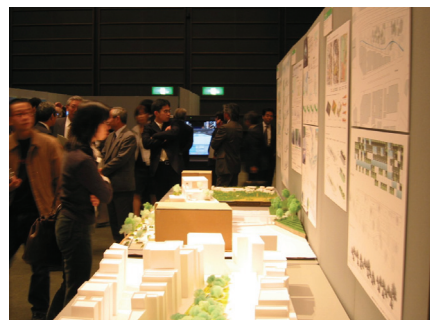
た清溪川復元事業などの都市再生・河川再生の取り組み事例などが紹介され、また、東京における河川再生として、渋谷川・古川をケーススタディーに提案なされました。

## 4. パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、まず各氏からCG等を駆使した映像により、水辺を活用した都市再生の提案があり、また、「水の都東京を再生」について、行政・ディベロッパー・住民の立場から現在の東京の水辺における課題と再生に向けた要望が出されました。

討議では、「高度成長期に建設事業が盛況になって約40年が経過した。今が街を更新する時期であり、チャンスである」、「都市河川の再生は、地元をはじめ多様な立場の人々が協働することが重要であり、不可欠である」、「水辺の再生には、地域の歴史を掘り起こして、それを大切にすることが生活に密着した水辺と緑の再生となる」など、白熱した議論が交わされました。

同時に「うるおいある都市再生」展として、慶應義塾大学生による渋谷川・古川周辺の都市再生の模型や、主催者団体による映像やパネル等を用いた都市再生の事例紹介等があり、参加者が見学することができました。



「うるおいある都市再生」展の様子

## 5. おわりに

基調講演では、水辺の再生に向けた力強い事例報告や提案がなされ、また、パネルディスカッションにおいては、市民にとっても興味深い議論がなされました。

本シンポジウムでは、都市や川づくりに対する多くの要望や提案がなされ、「水の都・東京」の再生が、実現に向けて確実に進んでいることが感じられました。